

【タイトル】なら、死ねば

【作者】梅光学院中学校・高等学校演劇部

2020年度作品 下関地区大会創作脚本賞

【作品介绍】

リナは高校3年生。祖母の介護で大変な母の事を思っ、音大へ行くのをあきらめ、短大に行って保育士になろうとしている。そんなリナがある日、不思議な女性と出会う。アルバイトでその「センセイ」に歌を教えることになったリナ。「センセイ」の家には祖母とそっくりの「死んだほっがまし」と叫ぶ老女が居て・・・リナが、「センセイ」から教えてもらった秘密の呪文が、リナの人生を大きく変える。

【登場人物の数】 6名〜8名

【上演許可を得るための連絡先】

梅光学院中学校・高等学校

梅光学院中学校・高等学校

〒750-0019

山口県下関市丸山町二丁目9番1号

電話：083-227-1200

FAX：083-231-6835

なら、死ねば

| |
|-----------|
| リナ |
| センセイ |
| ユメ |
| マツオカ |
| 母 |
| ミナト |
| 祖母(声のみ) |
| 先生の母(声のみ) |

①おごまろ：ヨケシ

舞台の上には何もなご。

リナが走ってへる。あたりを見回して、誰も居ない事を確認して、肩を落して、その場にしゃがみ込む。

一人の女性が走ってへる。「センセイ」だめ。
息を切らせて、立ち止まる。あたりを、誰もいないことを確認して。
大きな声で、乱暴に、まるで歌に乗せて自分の中に溜まった嫌な事をすべて吐き出すようにして。

おなごの夢を見る

おなごの夢の中で夢を・・・

あまりに乱暴に声をはらあげたので、せき込む。
つかつかと、歌い始める

画面下からの黒板に文字が飛び出る

おめわせいほなにか あいせいほなにか・・・

喉が痛む。

リナ　大丈夫ですか？

センセイ　あ・・・(何か言おうとして再びせき込み)

リナ　よかったら、どうぞ。のど飴。(のど飴を差し出して)・・・かわいいぞう。

センセイ　(せき込みながら、自分はいわいそうではないという仕草)

リナ　違う。かわいいぞうなのは、そんな風に歌われる歌。

見つめあう二人。静止画。

少し場違いなくらいに激しい音楽。

センセイの姿、消える。リナの独り言。(この独り言の間に、舞台には「学校」「リナの家」「センセイの家」の3つのエリアが出現する。)

リナ　その春。高校3年生の春。18歳の春。高校生最後の春。私はどん底にいた。こんな風に言つと、必ず「世界にはもっともっと不幸な子どもがたくさんいる」とか「思春期にはありがちな不幸自慢」とか言われたりするかもしれないけれど、実際、私の世界は真っ暗な雨雲に覆われていたのだ。私はずっとすぶ濡れだった・・・いつも一人っきりになるために通っていた、あの公園で、あの人に会うまでは。

ウエストミンスターチャイム。

リナ、「学校」のエリアへ。

②学校：リナの脱走

教室にはユメが居て、スマホをいじっている。

急いで机の中のをカバンに詰め込み、教室を出ようとするリナだが、誰かがくる気配を感じて

リナ　ユメー一生のお願い。

ユメ　あっうん。

リナ　シューゾーにつかまりたくないの、ちょっと引きつけたいくわないっぞの間
に・・・

ユメ　帰るの？部活は？

リナ　うん・・・

ユメ　部長がずっと休みって、ますいよ。今日は1年生にハモリの部分を・・・

リナ　うわ、来た来た来た来た。ごめん。とにかく、お願い。

マツオカ先生が教室に入ってくる

リナ、ユメをマツオカの方に押しやって、自分は死角に。

ユメ ええええ？

マツオカ あれ？立原は？まさか、もう帰ったのか？

ユメ ああ、ちょっとよくわかりません。

マツオカ 進路指導室まで来るように言っておいたのに。

リナ、ユメにお願いのポーズをして、じりじりと外へ。

ユメ はあ？

マツオカ ん？なんだ？

ユメ ……先生、今日の授業の時にやってくれたギャグをもう一回やってくださいー！

マツオカ は？

ユメ あれ、ものすごく面白かったんで。

マツオカ おお、そうか？

ユメ はい。お願いします。もう一回見て見たいんです。

マツオカ それほどのものでもないけどな。

ユメ そんな事なんです。おなががよじれて死にそうでした。だから、お願いします。

マツオカ そこまで言うなら。

マツオカ、「面白い事」をやる。

ユメ (棒読み)面白いー！もう一回ー！もう一回ー！

マツオカ 仕方ないなあ。

マツオカ再び。

その間にリナ、無事に脱出成功。

ユメ (リナを確認して)あー、なんなのよもう。

マツオカ どうだ？もう一回やってやろうか。

ユメ いえ、もう結構です。

マツオカ は？

ユメ やっぱ2回はないわーって、思いました。失礼しますっ！

ユメ、走って去る。

残されたマツオカ、もう一度同じギャグをやって、少し、間。

マツオカ おい、いび、びびということだー小鳥遊ーちょっと待ちなさいー！

③センセイの家：レックスン

センセイが、歌っている。

おなじ夢を見る

おなじ夢の中で夢を見る

風下がりの黒板に文字が躍る

しあわせとはなにか あいとはなにか

グラウンドでたれかが叫ぶ

答えようとしても声がでない

ピンポン、とドアベルの音。

リナが走ってくる。

リナ こんにちは！すみません！遅れました！

センセイ 10分遅刻。

リナ すみません、帰りがけに、先生につかまりそうになっちゃって。

センセイ 何か悪い事でもした？

リナ 違いますよ。進路指導の……ちょっといろいろメンドクサイ先生で。

センセイ 進路か、そうか、高3だもんね。どうするの？やっぱの、音大？

リナ ……短大です。保育士になります。

センセイ おお、保育士。私と同じね。

リナ 早く働けるよつにならたい。

センセイ そっか……はい、それじゃあ、今日もよろしくお願いします。センセイ。

リナ こちらこそ……センセイ……って、前から思ってたんですけど、お互いこそセンセイじゃなかおかしな感じがしますか？

センセイ ごめんね、センセイって長い事呼びわけてたんだ、そっちの方が……

リナ いいですけど……えっと……譜読みは、全部……

センセイ はい、一応。

リナ 一応じゃだめですよ。

センセイ はい！

リナ 前回までは、発声練習中心でしたけど、今日から、曲に入りたいと思います……はじめから八小節目まで歌ってみましよう。

センセイ はい。

センセイ、歌う。

♪夢見たものは 一つの幸福

願ったものは 一つの愛

リナ まず、この曲は、アウフタクトなので・・・小節の頭をちゃんと意識して。強弱記号も。じゃあ、もう一回同じ所から。

センセイ、歌う

リナ 発声は？軽くしか習ってないからと言って手を抜いて良いわけじゃない・・・って私も良く言われます。もう一回。

歌う

リナ うーん、なんだろ、どっ言った方がいいのかな、もっと音楽的に歌ってほしいかな。それに、歌詞の意味を考えつつも、声の響きを落とさない。声を立体的に保つ、かんじで。センセイ はい。

リナ 私は、音楽の先生から、「言葉の意味って考えたことある？」ってめへ怒られました。もっと二つ二つの言葉を大事にして歌った方がいいかも。例えば、『愛』は・・・んーっと・・・

センセイ 『そのものの価値を認め強へ引きつけられる気持ちが』かな。

リナ そう、そういひのを意識して。

センセイ なんか、すじ。

リナ なじが？

センセイ なんか、わかりやすいから。

リナ 私なんか、半年くらい音楽の先生にちよっと習った事があるだけの只の只の女子高生ですよ。いいのかな、こなので、本当じ。

センセイ いいのいいの。モンドパラーロ社のフルーツキャンディびわ味がおいしかったから

リナ ちょっと意味がわかりませぬ。

センセイ 私、あのど飴、大好きなの。子どものころから。

リナ まあ、私も、そうなんですけむ。

センセイ で、センセイ、お手本を聞かせてください。

リナ えー。

センセイ センセイ。

リナ、歌う。

歌の途中で、奥の部屋から何かが転がり落ちるような音がして、驚いて歌うのを止める。

センセイ ああ、またやった。ごめん、ちょっと。

センセイ、奥の部屋へ。

奥から話声が聞こえる。

センセイ 無理しないで。ああ、いいから、私がやるから。

センセイの母 いいの、私の好きにさせて。

センセイ 出来もしないのに、危ないから！

センセイの母 いいから！お手洗いくらい一人でいけるから！

再び、物が壊れるような音。

センセイの母 もう！こんな、なにからなにまで人の手を借りなくちゃならないなんて、情けない！

センセイ お母さん。

センセイの母 こんな身体になって、もう、死んだ方がまし！

センセイ もう、そんなことばかり。

リナ、思わず耳をすます

センセイ わかった、わかったから、ちょっと待ってて。

センセイが奥から出てくる。

センセイ ごめんね、ちょっと、母が、アしだから。今日は……

ナースコールのブザー。

リナ あ……

センセイ (奥に向かって) はい。わかったから。(リナに) ごめんね。

リナ はい。大丈夫ですか？

センセイ うん。平気。じゃあ、次までにどついたらいい？

リナ じゃあ……歌詞の意味を考えておへ。

センセイ 了解しました。センセイ。(封筒を出す) じゃあ、今日の分。

リナ 今日はいいです。ほんのちょっとしかやってない。

センセイ いいのよ、そういう約束だから。

リナ ありがとうございます(受け取る)

センセイ 次が楽しみ。

リナ ……じゃあ、私、帰ります。今日はありがとうございました。

センセイ 御礼を言っつのは、私の方よ。

④リナの家…リビング

ナースコールのブザー。

リナ ただいま。

返事はない。おいてあるダイニングテーブルの椅子に座る。
部屋の向こうから音がする。

祖母 サナエさん！サナエさん！ちょっと来て！サナエさん！

リナ、立ち上がって、祖母のいる部屋に行こうとする。
ナースコールのブザー。

奥から母がががが。

祖母 サナエさん！

母 ああ、リナ・・・今にはたがすぬからちまっや待って。

母 そのまま奥の部屋に。奥の部屋から会話が聞こえる。

祖母 サナエさん、テレビの音量がボリュームもなの。おっきい音量で置いたのが
になくなってる・・・

母 ええっほら、音量あるじゃない。

祖母 あんたが隠したんだー私にテレビを見せなごもりねー！

母 そんなことないですよ。

祖母 私のたった一つの楽しみを奪って、泥棒！人殺し！

母 大きな声出さないで。大丈夫だから。

祖母 私が死ねばいいと思ってるんでしょー！

母 そんなこと思わないじゃあな。

祖母 いや、思ってるー

母 ごめんなさい、私に分かるところに置いてるのが悪かった。ね、ほら、リモ
コン、あったから、テレビで見よう。何ですんね。

テレビの音が流れ始める

母 。

母 お待たせ。さ、ごはんにしてあげようか。

リナ ……おなかすいてない。食べたくなったら自分で作って食べるから。

母 受験生がそんなことじゃダメでしょ。脳に栄養あげないと。あんたちゃんとピアノ弾けてるの？最近家で全然練習してないけど。

リナ おばあちゃんが、うるさいって。どなるから。

母 気にしなくていいのよ。

リナ 学校の音楽室で練習してるから、大丈夫。

母 うん。

リナ おばあちゃん・・・どんどんひどくなるね。

母 身体が思うように動かないからね・・・仕方ない。

リナ 病院とか、施設とか、ダメなの？

母 死んでもいやなんだって。

リナ ……

母 何も心配しなくていいから。それよりも、将来のために、やらなくちゃならないことをきちんとやって。あ、ねえ、声楽の橋本先生、そろそろお誕生日じゃなかったっけ。何か送っとかなくていいかな。

リナ ……どうかな。

母 あんな有名な先生に、受験のためだって、急に無理いってレッスンしていただいてるんだから、そのへんは・・・

リナ 橋本先生、そういうの好きじゃないから。受け取らないよ。

母 そうっお電話へんはしておいだ方がよくなさっ。

リナ (少し強めに) いらって。余計な事してかえって機嫌そこねられたら、私が困る。

母 じめん。でもね・・・

リナ (かなり強く) いらって！

ナースコールの音

祖母 サナエさん！サナエさん！

母 はい。お腹すいてないんだったら、先、お風呂入ったらうっ後で、なにか夜食作ってあげな。

祖母 サナエさん！リモコンが、リモコンがないのよ。サナエさん！

リナ もう！(祖母の部屋に行こうとする)

母 (強く止める) いいから。リナはお風呂、ご飯、勉強。ピアノの練習も。ね。

母、祖母の部屋の方へ

入れ替わりに、自分の部屋からミナトが出てくる。

ミナト もう、ばあちゃん、足が動かないくせに声だけはでかいな。姉ちゃんの声がデカいのは、ばあちゃんに似ただな。

リナ あんた、いるんだったらちょっとはお母さんの手伝いしたらいいのに。

ミナト 母さんが自分でやるからいいって言うから。手伝いしようとしたらキしられるか

らさ、こっちもむかしっし。

リナ まあね。

ミナト それにさ、なんか、ばあちゃんに近づくの怖くてさ。この間、母さんが仮眠してる間に、ばあちゃんがお茶欲しかったから持ってたのね。そしたらさ、こっやって手握って「迷惑かけてごめんね。こんなばあちゃん、早く迎えが来た方がいいね」とか言っただけなんだよ。もうなんも言えねーって……っていうか、姉ちゃんこそなんもしてないじゃん。あ、そっか、姉ちゃんは受験生だからね。いいなあ、受験生。無敵だなあ。

リナ バカ。

ミナト ……姉ちゃん、進路指導のマツオカとなんかあった？

リナ え？シューゾーになんか言われた？

ミナト わかんないけどさ、根ほり葉ほり聞かれた。家での事とか。

リナ それで？

ミナト なんかわけのわかんないこと語ってたよ。あいつ、無駄に熱いからな。確かにシューゾーだな。

リナ 話したの？

ミナト 話してないよ。ばあちゃんがちょっと具合悪いから、母さん仕事やめて家に居ます、とか、父さんも最近工場に泊まり込みの事が多いです、とか、そんなことくらいい。そんで、マツオカが、姉ちゃんにこれ渡せて。(一)一枚のプリントを渡して。(渡)

リナ あしがと……

ミナト でも、おかしへね、なとて今頃進路相談のプリント高いだった頃の時期、進路とっくに決まってるんだよ。

10

リナ ……なんでだろうってね、無駄に熱いから、脳みそとっぴかになってるんじゃないの？

ミナト 姉ちゃんさ、がんばれよ。弟がいつものもんだけど、歌だけはうまいからな。

将来は歌の先生して、たくさん生徒集めてお、高収入に期待大！

リナ うん……

ミナト (無駄に筋トししながら)俺もさあ、高収入ねらえるように頑張らないとなあ、町内のスポーツ大会で優勝したくらいじゃダメだよな。もっともっと鍛えないとな。みんなはさ、『お前は、顔と運動神経だけで生きていける！』って言ってくれてるけど。どっちに行った方が高収入かな？バスケがいいかなーサッカーがいいかな？野球かなあ？ああ、夢がふくらむなあ、青春だなあ。

リナ あんた本当に脳みそ筋肉だよな。

ミナト 自分の人生なんだからさ、夢見るのは勝手だよ。姉ちゃんだって、歌の道に進むの夢だったんだろ。その夢に向かって……

リナ (その辺にあったものをいきなりミナトに投げつけぬ)

ミナト うわっ！

リナ ……お風呂入って帰る。

リナ、おしん

ミナト ねえ、おしん、おしん、おしん。

⑤学校…進路指導室…ユメとの決別

マツオカ 一体どういふことなのかな。

リナ ……お腹が痛いんでトイレ行っていていいですか。

マツオカ ダメだ！今日こそは逃がさん。がっつり話してもらってからな。

リナ 取調室かよ。

マツオカ 今の時期に急に進路を変えるとか、先生は見過ごせないな！。心配だな！。一体なにがあったのかな！。

リナ 特に何もありません。

マツオカ 何か家庭の事情とかか？

リナ 仕事に結びつくかどうかかわからない歌を勉強するよりも、保育士になったほうがケンセツチキだと思ったからです。

マツオカ お父さんお母さんはどう言ってるんだ？

リナ ……私がそう思うんだったら反対しない、と言っています。

マツオカ そうか ……

リナ はい。

マツオカ しかし、惜しい。お前、合唱部の部長だろ。合唱団とかに入ってバリバリ歌ってたんだろ。歌、好きだったんだろ。去年から歌のレッスンにも通い始めて、準備万端だったはずだろ。

リナ ……

マツオカ 今ここであきらめたら、後悔するかもしれないぞ。いいか、お前らは希望溢れる学生なんだぞ！多少の壁なら大丈夫、乗り越えられる。自分を信じて、行きたい所を選べ！望みは大きすぎるなんて事はないんだ！『少年よ大志を抱け』って知ってるか？

リナ 私女ですけ！

マツオカ 屁理屈をいっつな。岡村孝子も歌ってるじゃないか。『あーなたーのゆーめをーあーきらーめーなーいっ！』

リナ 誰ですかそれ。

マツオカ 大人は過去を見る生き物だが、若者はそつでない。バイ・マツオカ。どうだ、名言だろっ。

リナ はあ。

マツオカ とにかくだ ……

ユメが部屋にかけこんでくぬ。

ユメ 先生！校長先生がすべに來いって！

マツオカ なに？

ユメ なんか、職員室もざわついてましたよ！早く行った方がいいかも。

マツオカ お、おう ……とにかく立原！やるんだ！やる気になればどんな夢も叶う！明

日、もう一度じっくり話し合おうーそれじゃあ俺は校長室に行ってくるーじゃあなー気を付けて帰れよー！

マツオカ、走って出ていく。

リナ なにがあっただら。

ユメ 何にもないよ。さあ、シューゾーが戻ってくる前に急いで。

リナ サンキューー！

ユメ みんな待ってるから。

リナ ん？

ユメ 部活だよ。身を挺して助けてあげた私の顔をたてて、来てよ。リナ、全然来ないからさ、今度のコンクールの練習もぐだぐだになっちゃって。

リナ ……ごめん、私、合唱部、辞める。

ユメ ちょっと、3年生引退、まだもうちよっと先だよ。部長が何言ってるの。

リナ 行きたい短大ができたんだ。保育士になるの。勉強しなくちゃ。

ユメ 音大は？

リナ うん、保育士の方が、現実的だし。

ユメ だって……

リナ ごめん。

ユメ どうしたの？なにか困ってるんだったら相談してよ。何ができるかわかんないけど、できることはなんだってするからな。

リナ ……

ユメ 前を向いてれば必ず光が見えるーみんなでコンクール優勝ゲットするのが夢だったよね、だから……

リナ もう時間無いから、行かなきゃ。

ユメ 時間って、なに。

リナ バイトしてんの、私。

ユメ バイト？

リナ なんかね、歌を教えてほしいって人がいて。

ユメ バイトって、バシたらヤバイし……怪しいよ。

リナ まあね、その人ね、幼稚園のセンセイを長くやってたけど、お母さんの介護があつて、辞めたばかりなんだって。私みたいなのに歌習っても上手になるはずなんかないのね、でも、そこそこバイト料もらえるから。

ユメ ねえ、なんなの？どうしたの？

リナ 短大でも、入学金とか授業料とか結構かかるからね。バイト頑張ってお金貯めたいし。だから、合唱部はユメにまかせた。

ユメ はあ？

リナ 私なんか部長やってたのが間違이었다。歌はユメの方がずっと上手いからね。

ユメ 何言ってるの？

リナ 気付いちゃったんだな、才能ないんだって。自分。

ユメ 意味わからん。
リナ そういってだから。

少し、間。

ユメ ……なんか、がっかり。

ユメ、黙って出て行くじゃあね。

リナ じめん。

ユメ 謝られたら、余計むかしへ。

ユメ ヴン

リナ 勝手にがっかりしてなごで……

舞台の隅にがび、ユメが、歌う

♪おなじ夢の中を踊る
おなじ夢の中を踊る

⑦センセイの家

そわじ、かかぶるおちうり、リナが歌う

♪おなじ夢の中を踊る

♪おなじ夢の中を踊る

おなじ夢の中を踊るのは青い羽根の鳥

センセイがそわを引きしひへ

♪おなじ夢の中を踊る

おなじ夢の中を踊る

画下がりの黒板に文字が躍る

しあわせとはなにか あいとはなにか

センセイ やった、なんか、歌えるおちうりになってきた気がする。

リナ そうですね、すいぶん、良くなったと思います。

センセイ なにかあった？

リナ えっ？
センセイ いつもと、なんか、違うっ？
リナ ……ありました。
センセイ そっか、まあ、生きて生活してれば、いろいろあるわよね。
リナ でも、大丈夫です。
センセイ 本当に？

奥の部屋から、声が聞こえる

センセイの母 ねえ、来て、ちょっと来て。
センセイ はい、ちょっと待って。
センセイの母 早く来てー！
センセイ お母さん替えか。ちょっと待っててね。
センセイの母 早く来て。
リナ いえ、もう、今日は。
センセイ いぬね。ね。せっかくなので来てもらってね。今日、今日も落ち着いてシモンしても
らえないう。

リナ いえ……
センセイ (少く、唐突に) ……正直なところ、今日までこんなことを続けなきゃな
のかな、って、時々思う。

センセイの母 情けない。本当に……もう、死んでしまいたい。

リナ だからね、私は秘密の呪文を持っているの。
センセイ 呪文……
センセイ それを唱えたら、すべてが、上手くなる呪文。

リナ そんな都合のいいものがあわねえですわね。

センセイ ああ、それが。

リナ ……
センセイ そう、ものすごく強い魔法だからね、気軽に使えなければ。前にね、一
度だけ使いたかった時が、使うチャンスがあったの。でも、使えなかった。それで、今は、
このあつたま。

ナースコールの音

リナ あ……
センセイ うん。
リナ それ、教えてもらえませんか？
センセイ 呪文？
リナ 今日のバイト料はいいですから……その代わりに。
センセイ どうしてもっ？
リナ はい。

センセイ ……そうねえ……
リナ お願いします。
センセイ ……(リナに耳打ちをす)en
リナ ……
センセイ 使う勇気が、持てねばいいね。
リナ はい……

⑧リナの家

リナ ただいま……
ミナトが駆け寄ってくる。

ミナト ねえちゃん！遅い！
リナ (部屋の中を見て)げ……
ミナト ねえちゃん、なんかゆらかったの？

リナを待ち受けているのは 母とマツオカ、ミナトも隅の方に座る。

マツオカ おお、おかえり。何してた？お母さんが何度もスマホに連絡したんだぞ。
リナ あー……あの……ピアノ！ピアノ練習してた！スマホは、電源切れちゃ
って……

母 リナ、(じじ)。(じじ)座む)
リナ なに？顔が怖いよ。
母 いいから。

リナ、座る

母 これ、なに？

母が出したのはセンセイからもらった封筒。

リナ 私の机、開けたの？勝手に？

母 なんなの？これは。

リナ ……
母 言いなさい。

リナ ……バイトで。

マツオカ バイトは禁止だろう。何考えてるんだ。

リナ ……入学金とか、払えるかなって……

母 今日ね、橋本先生から電話があった。

リナ あ・・・
母 御月謝の返金の事で。

リナ ……うん。

母 先月から行ってないんだってね。レッスン。

リナ ……うん。

母 ピアノも。

リナ ……うん。

母 どうしてそんな勝手なことしたの。

マツオカ 進路のことか。

リナ もう、歌もピアノも習う必要ないし、お月謝がいらなくなったらその分・・・

母 お母さん、一言も音大に行くのをあきらめろなんて言った事なかったよね。応援するって言ってたよね。どうしてそれをわかってくれないの？

マツオカ 先生も、何度も言ったよな、あきらめろなって。こんなにみんなが応援してくれているのに、お前はどうしてそんなに後ろ向きなんだ。もっと前を見ろ！

母 お金のことなんか心配しなくていいんだから。

リナ するよ。心配。うち、いま大変なんですよ。それなのに、知らないふりして、夢とか、希望、とか言ってもらえないよ。

マツオカ お前、恵まれてるぞ。ご両親がこんなに理解を示してくれてるなんて。な。

ナースコールの音

祖母 サナエさん！サナエさん！

リナ 私だって、いろいろ考えた。お母さんも、お父さんも、ミナトも、みんなが我慢しているのに、私だけがちゃらちゃらした夢追いかけてるのなんか、おかしい。

祖母 サナエさん！

リナ だから、音大にはいかない。短大行って、保育士の資格とって、お金とかで家に迷惑かけないようにする。卒業してすぐ就職してもいい、とにかく・・・

祖母 サナエさん！

母 (マツオカに) すみません、ちょっと。

母、奥の部屋に

マツオカ 気持ちがよくわかる。家族を想う気持ちは大事だ。だがな、経済的な事だったら、とりあえず入学した後に、奨学金もろうとか、アルバイトするとかいろいろやり方はあるだろうが。ネガティブに物事をとらえるのはやめろ。信じろー信じればドリームスクラムトゥルーだ！

リナ ……うるさい・・・

マツオカ あ？なんだって？

祖母 ごめんねえ、もういいそのこと死んでしまった方がいいよねえ・・・

母 もう、やめて。お客様なんだから。

にはありがちな不幸自慢」とか言われたりするかもしれないけれど、実際、私の世界は真っ暗な雨雲に覆われていたのだ。私はずっとすぶ濡れだった……

リナが、走ってくる。全速力で、逃げてくる。息を切らせて。

センセイ どうしたの？ なにかあった？

リナ (息をきらして) 嘘つき！ あれは違う！ 全然魔法の呪文なんかじゃない！

センセイ 使ったのね。

リナ 言った！ 使った！ なら、死ねばって、死ねばいいって……でも、何も起こらなかった。何かいいことがおこるかもしれないって、ちらっとでも思ってたのがバカだった！ 全然違った。おばあちゃん、具合悪くなっちゃって、なんか、もう、ぐちゃぐちゃで、私、壊しちゃったかも。いろいろ壊しちゃったかも。

センセイ そう。

リナ ミナトが、泣きまじりな顔して「……って、私にもわかんないのに、どうしたらいいって。……って、どうしたらいいんだらう。」

センセイ どうしたらいいんだらう。

リナ 息が……苦しんで……

センセイ うん。

リナ ……死にそう……死にたい……

センセイ なら、死ねば？

リナ え？

センセイ なら、死ねばいい……でも……

静かな、間。

リナ ……うん。

センセイ うん。

リナ ……死んだら、ミナトが、泣くね。

センセイ うん。

リナ お父さんと、お母さんも泣くね。

センセイ シューソーも、ユメも泣く。

リナ おばあちゃんも、泣くかな。

センセイ 泣くね。

リナ おばあちゃんが死んだら、私も泣く。

センセイ 泣くね。

リナ みんな、泣くね。

センセイ 幸せになりたかっただけなのにね。

リナ 泣きたくないな。

センセイ 泣きたくないね。

リナ 泣かせたくない。

センセイ うん。

リナ 私、間違った。

センセイ 間違ったね。

リナ 本当は……

センセイ 本当は、こんな風に言いたかっただけなのに。

リナ 死にたいなら死ねば……でも、おばあちゃんが死んだら私は悲しいよ。おばあちゃんが倒れた日の事は忘れない。合唱のコンクールで一位になって、みんなで抱き合って喜んで泣いて、楽屋にもどってきたら留守電が入ってた。おばあちゃんが倒れたって。あの日からなにもかも変わっちゃった。いろんなものが無くなった……でも、おばあちゃんのせいじゃない。そうじゃないのね……私が歌に自信がなくなって、才能ないんじゃないかかと思いはじめて、音大行くのが怖くなって、そんなことまで、おばあちゃんのせいにして、進路無理やり変えて、おばあちゃんのせいだって、自分には責任ないんだって……おばあちゃん……ごめん……ごめん……

センセイ うん。

リナ こんな私、死んでしまえばいい。

センセイ そうだね、死んでしまえばいい。

リナ そして……死なないで、って言える自分になりたい。

センセイ ……ああ……

リナ な……

センセイ ありがとう。

リナ えっ……

センセイ ありがとう。これで私も……

リナ のスマホが鳴る。

リナ ……ミナト……(出る)……

舞台のどこかに、ミナト

ミナト おえちゃん、今だよ。

リナ おばあちゃんはっ……

ミナト とうりあえすは大丈夫だって。

リナ そっか……よかった。

ミナト おばあちゃんさ、救急車の中でさ、いつもみたいに手握ってさ、でも、いつもと違うの。ごめんとか死ぬとか一言も言わないの。ずっとさ、リナが帰ってきたらお祝いのご馳走作らなきゃって言ってんの。なんていえばいいのかわかんなくてさ……

リナ 倒れた日、コンクールの日、おばあちゃん、きっと私は優勝するからって、お祝い……おばあちゃんさ、コンクールの日、おばあちゃん、きくと私は優勝するからって、お祝い……おばあちゃんさ、コンクールの日、おばあちゃん、きくと私は優勝するからって、お祝い……おばあちゃんさ、コンクールの日、おばあちゃん、きくと私は優勝するからって、お祝い……

ミナト いいからさ、もう、いいからさ。

リナ お母さんだよ。

ミナト なんか、お医者さんここで、説明受けてる。ねえちゃん、来てよ。総合病院。

リナ うん。ごめんね、ごめんね。

ミナト いいって。早く来てよ。心細くて死にそうだよ。

リナ 死ぬな。ねえちゃんが助ける。

ミナト わかったから。

リナ 行く。すぐに行く。待ってて。

ミナト うん。

電話を切る。ミナトの姿、消える。

リナ (センセイに) 行ってきます。

センセイ うん。

リナ、へ、出てい。

センセイ その春。高校3年生の春。18歳の春。高校生最後の春。私はどん底にいた。こんな風になると、必ず「世界にはもっともっと不幸な子どもがたくさんいる」「とか」「思春期にはありがちな不幸自覚」とか言われたりするかもしれないけれど、実際、私の世界は真っ暗な雨雲に覆われていたのだ。私はずっとすび濡れだった・・・すび濡れのまま、逃げ出して、何もにもなれず、結局、祖母と同じように死にたがる母の介護をする日々を過ごして行くようになった

・・・私は、時々夢を見る。高校時代の私が、雨雲を滑り去るのと同じような夢、小さな小さな傘を見つけて、それをさすのができる夢。そして、その傘を周りの誰かにも差し掛けてあげることができる夢。夢の中の私は、雨の中でも晴れ晴れとしていて・・・それは、私に降り注ぐ雨を、拭き取ってくれる。

センセイの視線の先には、シルヒット。言葉は聞こえないが、何を話しているかはわかる。祖母の病室の前にいるらしい家族に、リナが合流する。

母親やミナトに謝罪しているリナ。家族で、寄り添って、待つ。

祖母が帰ってくるのを、待つ。

⑩ものがたりのおぼろ

リナとユメがやっぴい。

リナ おかしー絶対おかしー

ユメ 引っ越したとかじゃなくて？

リナ 家自体がなくなってた。

ユメ ありえないでしょ。

リナ ありえない。ありえないから、混乱してる。

ユメ 悩みすぎでどこか変になっちゃってたんじゃない？妄想？

リナ 違うよ。ちゃんと存在したんだよ、センセイ。一緒に歌を歌ったんだよ。

ユメ 怪しいなあ。

リナ そんなことないって。一人になりたいって、よく来てたこの公園で、あのへんから、こっやってどかどかーって走ってきて、ガーって大きな声で（歌う）

おなじ夢を見る

おなじ夢の中で夢を見る

リナ それが、ひどい歌でさ。本当・・・それが段々、ましになってただけど。

ユメ ふうん。

リナ 本当、いい歌が歌えるようになってたんだよ。

ユメが続きを歌う。

ほつちのほつち

ちつちのほつち

ほつちのほつちの鳥

リナ うわ、やっぱりユメにはかなわんわ。劣等感。

ユメ 悔しかったら通らしてこー！

リナ おう、受けて立つわ。

二人、深呼吸。

ユメ でも、ほんと、どこ行っちゃったんだろっね、その人

リナ んー、でも、まだそのうち会えそっな気がします。

ユメ ふうん。

リナ だからね、歌、やめられないな。困ったな。

ユメ 困ったね。やめられないね。

リナ ちよっと、一発、歌っちゃっっ喉ならし？的なの？

ユメ 大丈夫？約束の時間。

リナ おばあちゃん、病院中に、「今度孫の学校の合唱部が来るんです〜」って鼻高々で触れ回ってたって。下手な歌歌えないからさ。

二人、歌う。

じいかに「センセイ」も一緒に。

おなじ夢を見るの

おなじ夢の中で夢を見るの

黒板がりの黒板に文字が躍る

あいつはなにか あいつはなにか

グランドでたれかが叫ぶ

あいつはなにかあいつはなにか

あいつはなにか

あいつはなにか

あいつはなにかあいつはなにか

あいつはなにか

あいつはなにかあいつはなにか

黒板がりの黒板に文字が躍る

あいつはなにか あいつはなにか

あいつはなにか いま 私は知る